広報 留萌 1991 2 No.395

特集 学校給食は内容充実の時代…。

◆連載 いま留萌むかし 第五十話

●留萌農業事始

―ムリクタウシ（岬也）住古土人が粟の糠を此処へ捨て溜りて山に成りし処と云―

これは安政三年（一八五六）に留萌を訪れた松浦武四郎の「西蝦夷日誌」の中に書かれている地名の解説である。現在、海のふるさと館が建っている辺りの地名である。この地名が留萌の農業の始まりを示す重要な地名なのである。

アイヌ語でムルクタとは粟や稗の殻を捨てた場所という意味であり、留萌における雑穀の栽培を示す傍証となるからである。唯、いつごろから雑穀の栽培が行われたかは定かではない。

福山秘府に「享保元年五月蝦夷に雑穀を種えしむ」とあり、この時にアイヌの人たちに粟、稗等の雑穀の栽培を奨励したらしい。しかし、アイヌの人たちはそれ以前から雑穀の栽培はしていたらしい。ただ、正徳元年松前志摩守申上書によるとその範囲は東は白老、西は積丹半島以南であったという。

時代が進み、幕末安政年間になると

―西海岸イシカリよりマシケ、トママイ辺まで、凡四十里、稍同様之地勢にして、口蝦夷地に一等を譲り候へ共、夏作粟稗までは随分相熟すべき由にこれ有候―と「蝦夷地開拓諸書付諸伺書類」に記載されており、安政年間までに西海岸の奥地まで栽培されるようになってきていた。留萌でもこの頃になると、「西蝦夷日誌」の中のムルクタウシの地名と共に三泊周辺に

―往古は此処に畑多かりしものと見ゆるなり―と記載されている。このことから、留萌のアイヌの人たちの間でも粟、稗等の雑穀が栽培されていたであろうことは推測される。

しかし、アイヌの人たちの雑穀の栽培はあくまでも副業の域をでたものでなかった。アイヌの人たちの生業は本来漁猟が主であり、農耕は婦女子の手によるものであった。収穫物は副食物として利用され、また、粟、稗等は濁酒の材料とされたのである。

和人の中でも農業を生業とするものはこの蝦夷地には育たなかった。その必要性がなかったからにほかならない。つまり、蝦夷地は産物が豊富であり、その産物を出荷することにより米等の穀類を入手することができた。このため農耕を積極的に推し進める必要がなかったのである。特に西海岸では鰊が大量にとられていた時代であり、鰊漁で生計がたてられる状態であった。

留萌の運上屋の周りでは小規模に根菜類が栽培され、運上屋で働く人の食卓を飾ったにすぎない。

留萌で本格的に農耕が始まるのは江戸時代末に庄内藩がこの留萌の地を領有する時まで待たなければならない。庄内藩は自分の領地に本藩の農民を移住させ、本格的に開拓を試みようとした。これが留萌における本格的な農業生産の始めということができよう。そして、この庄内藩も明治維新によって中断し、明治新政府による北海道の本格的な開拓の着手によって留萌の農業も根づいていったのである。

寛政年間のルルモッペ

平成3年2月／発行・留萌市
編集・企画 振興室
印刷・白鷗印刷株式会社